

学生の主体的な学びに着目した授業展開の試み

附属教育実践総合センター・太田佳光

1、本授業のねらいと概要

本授業は、教育実習を終え、教育現場のさまざまな課題を自分の問題として捉えられる3回生を中心とした授業である。教職に関する選択科目であるため、例年、意欲の高い学生の受講が多い。

授業内容は、学生がさまざまな教育実践上の課題を主体的にとらえ、その対応策を、教師になった自分自身の問題として考えることをねらいとしている。そのため、逸脱やいじめなどの問題を実際の事例を中心に提示し、その対応について具体的に考察することとしている。本年度の受講生数は、33名であった。

本学部のディプロマ・ポリシーとの関連では、「教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる。」に、主として関わる。

授業概要は以下の通りである。なお、シラバスに掲載した内容を、実際の授業においては、若干の変更を加えた。それは、後に述べるとおり、学生の主体的な学びに着目した授業展開を試みたからである。

- ①教育問題の現状と課題
- ②授業妨害と逸脱（1）ある事例の検討から
- ③授業妨害と逸脱（2）対応策の検討
- ④逸脱行動と立ち直り（1）ある事例の検討から
- ⑤逸脱行動と立ち直り（2）対応策の検討
- ⑥逸脱行動の現状と課題：教師の役割と逸脱論
- ⑦第1回から第6回までの補足説明（授業の進み方により、第6回の内容が入ることもあるため）
- ⑧いじめ問題と教師（1）ある事例の検討から
- ⑨いじめ問題と教師（2）対応策の検討
- ⑩いじめ問題と学級集団（1）ある事例の検討
- ⑪いじめ問題と学級集団（2）対応策の検討
- ⑫いじめと学級づくり（1）いじめが起きない学級づくりとは
- ⑬いじめと学級づくり（2）集団を意識した学級づくり
- ⑭いじめと学級づくり（3）：人間関係を意識した学級づくり
- ⑮総括的討論

2、授業の工夫と学生評価

本年度は、学生の主体的な学びに着目した授業展開を試みるため、これまでの取り組みを生かしながら、学生たち自身による課題への対応策を中心としたグループディスカッションを行った。すなわち、実際の課題に対して、教師としての対応策を小グループで話し合い、そのまとめをA4用紙に書き写し提出させた。次の時間、小グループによる発表（3グループ程度）、その後の討論という流れである。

昨年との違いは、今年度はあくまでも、学生たちの対応策を尊重し、教師による指導は最小限にとどめたことである。それは、実際の教育現場において、自身が考え決断した対応でないと、実現可能性が低いと思われるからである。

なお、授業終了時に、学生に対して無記名のアンケート調査を実施した。本年度も自由記述方式を用いた。その結果、本授業の工夫への評価として以下のようなコメントがあった。

・「実際の事例を基に話し合ったり、先生の解説を聞いたりしたので、問題をより現実的、具体的に捉えることができた。それぞれのグループで話し合っ、グループごとに意見を出しあうという方法も面白かった。」

・「教師は試行錯誤を繰り返しながら努力を続けるものだ学びました。はじめから成功ばかりのきょうしなんていない。失敗を恐れ何もしないより、挑戦していく方がよい。その上で、どう子どもに寄り添えばいいのか、対応すればいいのかを学ぶことができました。」

・「班での話し合いや、非行やいじめ等テーマが多様で良かったです。資料も、理論や構造等が分かりやすく、もう一度、今度は自分の力で学び直したいと感じました。」

ほとんどの学生が同様のコメントを寄せてくれ、おおむね本授業のねらいは達成されたと考えることができる。

課題は、学生による対応策の具体が未熟なものになる傾向があったことである。教師の指導がどの程度まで必要かが、今後の課題となる。